

翔べ！
世界へ

規格標準化の仕事で 留学の経験を活かす



◀大学院卒業式にて、修士課程修了証をいただいた。残念ながら一年間の留学だったため、修士論文の提出までには至らなかった

イスクの規格標準化に係わっている。国際規格は、ISOによる標準化が、また日本国内での規格は、JISによる標準化がよく知られている。しかし、これら公的機関による標準化活動は、完了に至るまで相当の時間を要するのが一般的で、商品の陳腐化が早いIT関連分野では、製品化に規格化のスピードが追いつかないおそれがある。このため、IT関連の規格標準化はデファクトと呼ばれるような、事実上の標準、すなわち公的な標準化を待たずにプライベートな規格を公開し、製品化により世の中に広めてしまう、というようなやり方が一般的に行われるようになってきている。

光ディスクでもそうだが、IT関連の商品の主要な市場はアメリカであり、規格化においてもアメリカの

市場動向を常に捉えておく必要がある。規格の仲間づくりをすることや、競合する規格の情報を収集する活動も重要である。このために、現在は毎月一回程度、アメリカに出張し、規格化関連の会合に参加したり、市場動向・競合動向の調査を行っている。

会合では、企業の利益代表として、互いの意見を戦わせる議論となる場合も多く、留学中に接してきたアメリカ人たちの物の考え方、振る舞い方などが、役に立つことが多い。

議論の中で特に気をつけなければならぬのは、常にフェアであることである。企業活動の一義的な目的は利潤を上げることであるが、当然のことながらいつも公明正大であることが求められる。独占禁止法による判断まで至るケースは、幸いにして私の関連する業界では今のところないが、会合によっては、参加するに当たってこのような点を確認事項として挙げる場合もある。

民間企業で留学経験を活かす

国際文化教育交流財団から派遣された留学生の多くが大学等の研究

職・教職についている中で、私のように、留学を経て民間企業で働いている者は少ないようである。しかし留学生として過ごした日々の糧を現在の活動に十分に活かしている、という点では変わらないつもりである。留学の機会を与えてくださった国際文化教育交流財団に大変感謝している。

経団連が事務局を務めている各種奨学金運営団体の活動により、毎年高校生から大学院生までの多様な奨学金が留学し、今日、その経験を活かして内外のさまざまな分野で活躍している。本コーナーは、留学先での経験と現在の活動の模様を紹介することにより、これら奨学金を送り出してきた奨学金運営団体への一層の理解促進と、これを支え、協力してくれた企業への活動報告とするものである。

国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長 故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三〇カ国の大学・大学院へ一四五名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三五カ国四〇五名の外国人留学生への奨学金の供与や文化教育面での事業運営を実施してきている。

お問い合わせ・連絡先
経団連社会本部

高橋正悦

たかはし まさえつ

リコー パーソナルマルチメディアカンパニーMMP事業部
SD事業推進室商品戦略グループ主席係長



国際文化教育交流財団第8回生（1983年度）

82年東京工業大学理学部物理学科卒業。83年～84年米国カリフォルニア大学バークレー校留学。84年同校大学院材料科学専攻修士課程修了。85年東京工業大学大学院理工学研究科物理学専攻修士課程修了。85年新日本製鐵入社。88年リコー入社、光ディスク（コンパクトディスク、DVD等）の規格策定に携わる。

世界最高レベルの電子顕微鏡

私が国際文化教育交流財団の奨学生として、米国に留学したのは、一九八三年九月から一九八四年の八月までであった。カリフォルニア大学バークレー校大学院の材料科学専攻の学生として学ぶ機会を与えていただいた。

当時のカリフォルニア大学バークレー校には世界最高の分解能を誇る透過型電子顕微鏡が設置され、国立電子顕微鏡センターとして米国の電子顕微鏡研究の最先端を誇っていた。同センターは原子核研究で著名なローレンスバークレー研究所の一角に位置し、サンフランシスコ湾を見渡す高台にある恵まれた環境に囲まれている。

本来ならば、Atomic Resolution Microscope（原子レベル解像度顕微鏡）の名前が付けられた顕微鏡には、全米から研究者が殺到し、私のような入りたての学生がこの顕微鏡を使用できる時間は、非常に限られる可能性が高かったことが予想された。幸運なことに、顕微鏡は設置されたばかりの頃で、電子顕微鏡メー

カーがまだ調整を行っている段階であったため、調整と称して、十分に使用する時間を与えていただいた。

私の所属していた材料科学専攻の講座自体は、バークレー校キャンパス内にあり、学問領域として近い金属工学や鉱物学等の専攻の講座と歴史のある校舎を共有していた。研究所とキャンパスの間はかなり離れて位置しているため、研究所とキャンパスを往復するバスを日に何度も利用することになった。

学生寮での生活とルームメイト

留学期間中、私は大学のインターナショナルハウスと呼ばれる留学生とアメリカ人学生が半数程度ずつ同居する学生寮で生活した。この学生寮には、全世界と言って良いほど各国からの留学生が集まっている。カフェテリアでは、さまざまな国々の留学生と食事をしながら会話をすることができた。

最初の半年間は、アメリカ人のルームメイトと部屋を共有することになった。ルームメイトは、日本への留学経験があり、日本語でのコミュニケーションも一部可能であったた

め、互いにとっての外国語で話すことで言葉の勉強をすることもできた。

留学から帰国した後は、ルームメイトとは疎遠になっていたが、彼とは何か不思議な縁があり、あるきっかけで、現在私の勤める会社のアメリカ現地法人に勤務していることが判明した。社内電話帳を調べている際、ふと覚えのある名前が目に入り、電子メールで確認してみると、まさにそのルームメイトであった。それ以来、互いの国に海外出張する際には、連絡を取り合うようになった。

私は当初より、日本の大学院に戻った後、民間企業への就職を考えていたため、留学を一年間として計画していた。日本に帰ってからでは就職活動時期が終わってしまうため、留学中から就職活動をしなければならなかった。学生寮には、企業からの留学生も多くおり、その中の一人から紹介をいただき、ある会社と面接試験に及び入社の内定を早々と受けることになった。

規格化と国際化

現在、私はDVDと呼ばれる光デ